

## 序

日本の舞踊に關して、これまで新聞雜誌に寄せたものを選んで訂正増補し、更に幾篇かを新しく書きおろし、取りまぜて本書一卷をまとめた。題して日本舞踊小史と呼ぶのは、同じ名の一文に因むが、むかし々の姿、能樂と前代の藝能、三都と名古屋の舞踊と三つに分けた各篇が、おのづから日本の舞踊の歴史をも語つてゐる。

むかし々の姿の項に於て、悠遠な上代に既に端を發しながら、その傳統が永く後世に残り近世化されて傳へられた舞踊上のさまざまの姿を、私は描かうと試みた。上代の人々の生活が現代のそれと全然別なものでない限り、脈々たるつながりは發見される。そしてそれは將來にも及ぶことである。能樂は日本の舞踊史上の劃期的な産物で、その前代の藝能と能樂との關係は、その後世の藝能と能樂との關係と共に、研究の興味も價值もある。能樂が一朝一夕に大成しなかつた事や、種々雑多な前代の藝能が、巧みに能樂化された事を知るのは、一つの驚きでもある。能樂のみでなく、或る程度の完成を見た藝能は、多かれ少なかれ、必ず此のやうに前代の物に負ふところがあると思ふ。

三都と名古屋の舞踊の項に於て、私は歌舞伎の所作事の最後の形勢を語つた。また明治維新

に於て、百般の文物が一變し、江戸のをどりが東京のをどりと變る有様を、志賀山流の現状に見た。志賀山流は未だ亡びはしない。然し江戸の志賀山が、東京の志賀山に變つてしまふのである。西川鯉三郎に始まつた名古屋西川流は、嘉義と石松の死に依て、同じく一變しようとしてゐる。京都に於ては百一歳の長壽を保つた片山春子の、文字通りの歴史的存在を紹介した。大阪の山村流は山村らくの死に依て、これまた面目を一新せんとしてゐる。今までの山村獨特の長所とは何であつたかを知るのは、殊に今日必要である。名古屋と京阪の舞踊の文献は過去に於て、餘りに貧しかつたが、その缺點は本書が多少なりとも補ひ得た。

この三都と名古屋の舞踊の項を讀まれるならば、舞踊が歌舞伎から獨立始める過渡の現象を、まざ／＼と承知されようと思ふ。西川嘉義の生涯の如きは、舞踊家として立つ者に幾多の教訓を與へてやまぬものであらう。日本の舞踊が將來大に發達するためには、幾多のすぐれた舞踊家が輩出しなければならぬ。その人達は先進の間に嘉義のやうな人がゐた事を、充分に知つておいて欲しいと私は切に願ふ。この本も今まで書いた幾冊かのものと共に、少しでも早く日本の舞踊の黄金時代を迎へたいといふ氣持一杯で書上げた。

昭和十六年四月

小寺 融 吉

目次

自序

むかしの姿

舞踊家と音楽家の發生

白拍子の歌舞

大太鼓を打つ目的の變遷

亂聲より見世スガガキへ

前期國劇史の舞臺

能樂と前代の藝能

能樂が嗣いだ神樂の傳統

能樂と神樂と

目次

三  
一六  
三六  
三五  
二五  
一

正月の謡初と拜舞	一三三
移り舞の意義	一四二
シテが舞を舞ふ理由	一四七
舞扇の變遷	一五九

三都と名古屋の舞踊

江戸の志賀山	一六九
西川嘉義の一生	一八二
西川石松と花子	一八四
片山春子	一八四
上方の所作事と座敷舞	一九一
山村流の舞	一九〇
山村流の系譜	一九九
片山春子と山村らくの死	二九二

日本舞踊小史

六九

寫眞・挿繪解説

三五

寫眞目次

舞樂納會利……………一

寶生會の能舞臺……………二

道成寺の能の鐘……………三

弓矢の立合の拜舞……………四

十四代志賀山勢以と西川嘉義……………五

片山春子と山村らく……………六

挿繪目次

目次

三

白拍子靜（前賢故實）……………二

白拍子微妙（同上）……………三

筑紫の風流祭より（兔園小説）……………四

花宿と舞屋……………三

長田神社の鬼追の鬼……………五

現在の能舞臺……………九

檜扇を持つ殿上人（繪本藻鹽草）……………一七

尾張濱主の舞（前賢故實）……………一四七

童舞納會利（嚴島名所しるべ）……………二〇四

王子神社の花鎮めの舞（江戸名所圖會）……………三三

保名狂亂（芝居筋書）……………三三〇

索引